

16～17世紀の金　—印子金と分銅金—

【黄金を集める 一印子金と分銅金一】

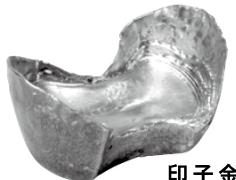
日本は、16世紀半ば以降、大量の銀を輸出する一方、中国などから金を輸入していました。ポルトガル船が運んだ商品のリストにも、中国から日本に運んだ金が記されています。

輸入した金のなかには純度の高い金塊「印子」が含まれており、その後、日本国内でも「印子」が作られるようになりました。

●輸入された印子金

徳川家康が、外国船に「印子」を注文し、その対価として「丁銀」を支払ったことが、『当代記』に記されている。

1. 1607(慶長12)年、徳川家康(大御所)は、100目あるいは105目の印子1万個を眺めた。
 2. 印子1個が銀1貫400目にあたり、印子1万は銀1万4千貫に値する。
 3. 唐人は、もともと銀を吹き直し、(含まれていた)銅は吹き捨て、銀のみを取り出していた。
 4. 今回の大御所の命令では、丁銀(慶長丁銀)で取引するということであり、唐船の者は不快に思っている、という。



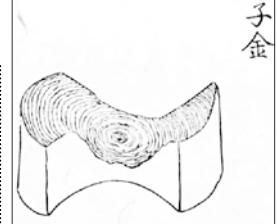
印子金

16世紀半ば頃から17世紀初頭にかけて、「印子」が、中国や東南アジアから輸入された。輸入された印子は、その形状から、舟印子、花印子とも呼ばれた。

印子1つは100目(375g)が基本であるが、50目もある。

南蛮貿易で中国から輸入された金

スペイン人は、16世紀末頃のポルトガル人の日本貿易（南蛮貿易）について、中国から日本へ生糸と金などを輸出したとの記録を残している。「3000両から4000両(110～130kg)の金が(1年に)運ばれる。広州では通常の金が1両あたり5.4両に値するが、日本では7.8両で売られる」(岡美穂子氏論文掲載翻訳史料より、カッコ内当館補足)とある。



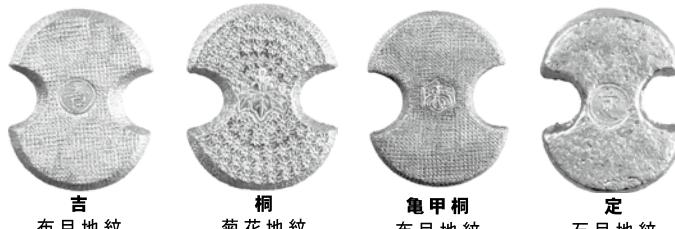
『金銀図録・五』に 描かれた印子金

●印子金と分銅金

家康の遺金の中には、金の「いんす」と金の「ふんどう」が含まれていたことが史料に記されている。

1616（元和2）年に没した家康の遺金は、尾張・紀州・水戸の御三家に分与された。この史料は、御三家に分与する金銀を久能山の蔵に納めた際の内訳を示している。

1箱100個入りの「ふんどう」(分銅)が41箱分含まれ、計4,100個になる。また、分銅とは別に1箱100個入りの「いんす」(印子)も含まれていた。



当館所蔵の分銅金
重さ 100 目(約 375g)

当館所蔵の小分銅（小分銅）は、尾張徳川家に伝來したもの。徳川家康の遺産に含まれていたものと考えられる。小分銅は現存するものは5種類あり、当館では吉・桐・亀甲桐・定の4種類を所蔵する。

尾張徳川家の始祖となる徳川義直（家康の9男）が家康より分与された財産の内訳を示した中料。

内訳の中に 100 目吹の「ふんとう」(分銅) が含まれていたことが記されている。100 目吹とは約 375g で、当館所蔵の小分銅とほぼ同じ重さである。

廿四日大雨、廿五日終夜又大雨、
當年は、今黒船不渡、是は通子去年唐船頭に告て云、
船多渡海之間、系日增多、今年又猶着船は、系可
為下直と云々、依之不來歟、但大御所より印子壹萬御
讃と云々、印子一つと云は、或は百目或百五文目有之
と也、印子壹つを銀壹貫四千貫目の價歟、もとより唐人は銀を吹
壹萬は銀壹萬四千貫目の價歟、もとより唐人は銀を吹
直し、銅夾を皆吹捨、本々の銀迄を取、此度大御所命
には、不吹して丁銀を可取由曰、是唐船の者共不快と
云々、

【前略】	
一金九箱	玉金
一金三箱	さほふき
一金四拾壹箱	ふんどう
但壹箱二付、百入之由、	いんす
一金壹箱	小判くらゐ
但百入之由、	甲州判
一金拾箱	後略
但壹箱二付、式千兩入之由、	久能御藏金銀請取帳
一金	元和二年辰霜月廿一日

一 壱万 武千枚分	覺
一 四千枚	小判
一 式千枚	後藤判
一 式千枚分	甲州判
但百目ふき數千也	ふんとう
合式万枚	
一 九 千 五 百 三 拾 壹 貫 五百目	はいふき
一 五 千 四 百 六 拾 八 貫 五百目	だいくく
此内千八拾八貫目者	小板吹
合壹万五千貫目	
一 三 千 貫 目	
此内八百貫目ハ大こく	はいふき
已上	
元和二年辰	
卯月二日	
尾張宰相(花押)	
「徳川義直金銀子覺」(朱書當館)	

【黄金を蓄える 一秀吉・江戸幕府がつくった大分銅】

豊臣秀吉や徳川家康、その後の江戸幕府は、金銀山を直轄化し、集めた金銀を蓄えるために分銅型の金塊・銀塊をつくりました。徳川家康は、金銀を蓄えることで幕府の財政基盤を確立しました。

●秀吉の大分銅からつくった大判

秀吉は、1591（天正19）年と1597（慶長2）年、後藤家に命じ、金の大分銅をつくらせた。その後、家康は豊臣氏の莫大な財力を恐れ、豊臣秀頼に方広寺再建などの寺社修造を勧め豊臣氏の金銀を消耗させようとした。秀頼は、寺社修造の支払いにあてるため、大分銅を鋳つぶし、大判をつくった。



天正大判（大仏大判）は、1608（慶長13）年から1610（慶長15）年にかけて、後藤徳乗が大分銅（千枚分銅）を鋳つぶしてつくった。方広寺大仏殿再建のためにつくられたことから、大仏大判ともよばれる。この再建には、秀吉が蓄えた千枚分銅13個、二千枚分銅15個が使われた。

天正大判（大仏大判）

（後鋳）

●江戸幕府がつくった大分銅

江戸幕府は、1604（慶長9）年、銀の大分銅80個を後藤家につくらせた。また、明暦の大火で江戸城本丸が炎上した際に焼けた金銀で、1659（万治2）年に金20個、銀128個の大分銅をつくらせた。慶長・万治の大分銅の製作は、いずれも後藤庄三郎があたった。

◆家康の大分銅

1615（元和元）年の大坂夏の陣後、家康は没収した豊臣氏の大分銅を藤堂高虎、井伊直孝に与えた。



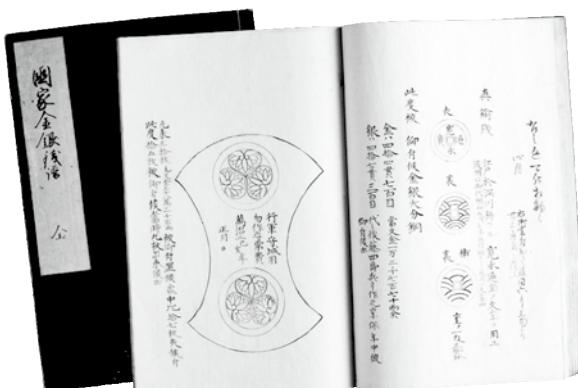
『金銀座書留』（国立国会図書館所蔵）

『銀座書留』『銀座人手帳』などともよばれ、銀座の公務が事柄ごとにまとめられている。「御分銅之部」に1604（慶長9）年と1659（万治2）年につくられた大分銅とともに、後藤庄三郎が奉行にあたり、徳川家の葵紋が使用された。また、慶長の大分銅は石見灰吹、万治の大分銅は佐渡灰吹と記されている。

慶長・万治の大分銅とともに、後藤庄三郎が奉行にあたり、徳川家の葵紋が使用された。また、慶長の大分銅は石見灰吹、万治の大分銅は佐渡灰吹と記されている。

◆万治の大分銅

万治の大分銅の銘は後藤四郎兵衛が彫り、鋳型は御用鋳物師であった椎名がつくった。



『国家金銀錢譜』に描かれた万治の大分銅

慶長大判
(明暦判)

明暦の大火で焼けた江戸城の大判を1658（明暦4）から1660（万治3）年にかけて製造しなおしたもの。「明暦判」「江戸判」とよばれ、形状は元禄大判に近くなっている。

青木敦書（昆陽）が金・銀・銭を模写し、製造年代や重さなどを示した図録で、万治の大分銅の図も描かれている。万治の大分銅は、平均55匁位（80.0%）、重さ43貫450目（約163kg）であった。銘は、儒学者林春斎（林鷺峰）により、「行軍守城用 勿作尋常費 万治二年己亥正月吉日」とされた。この史料との銘の違いは、書写の際の誤記と考えられる。

【関連年表】

		金	銀	銅	対外關係	一般事項&その他
1533年 1542-1569年 1550年頃 1569年	天文2 永禄12	秀吉、天正大判を製造	石見銀山の産出増加(吹吹法の採用) 戦国大名による金・銀・銅山の開発が盛んに行われる	室町幕府、大名しばしば操銭令を出す この頃、私鋳銭の鋳造盛んに	1543 鉄砲伝来 1549 キリスト教伝来	1573 室町幕府滅亡 1582 本能寺の変(織田信長自刃) 1590 豊臣秀吉、全国統一 1592-93 文禄の役 1597-98 慶長の役 1600 関ヶ原の戦い 1600頃 伊勢山田地方で山田羽書が流通
1588年	天正16	秀吉 1582没	秀吉、天正大判を製造	秀吉、各種の公用銭を製造	1601 朱印船制度	1603 家康、江戸幕府を開く
1590年 1596年頃 1599年 1601年	天正18 慶長4 慶長6	家康、甲州金の制を江戸市中に採用する 家康、武蔵墨書き小判、駿河墨書き小判を製造 家康、額一分金を製造 家康、京都に小判座出張所を設置	家康、伏見に銀座を開設	宿駅間・川渡しの駁賃を公定 (永楽銭1枚=鏹銭6文通用)	1602 オランダ東インド会社(VOC)設立 1604 糸割符法を制定	1604 糸割符法を制定 1607 朝鮮通信使来日(国交回復)
1602年	慶長7	後藤庄三郎、幕府の御金銀改役に就任	この頃、家康、石見大森・但馬生野銀山等を直轄化	駿府に銀座を設置	1609 オランダ商館、平戸に置かれる 己酉約条(対馬と朝鮮)	1611 中国船の長崎貿易を許可 1612～1613 繁敷令 1613 イギリス東印度会社平戸に商館設立
1603年	慶長8	2代秀忠 1605～1623	駿府に小判座出張所を設置	伏見銀座を京都へ移転	1614 大坂冬の陣 1615 大坂夏の陣 豊臣氏滅亡	1614 大坂冬の陣 1615 大坂夏の陣 豊臣氏滅亡
1604年	慶長9				1616 朝鮮通信使来日 (大坂平定、日本統一の祝賀)	1617 秀忠上洛
1606年	慶長11					1622 元和の大殉教 1623、1626 秀忠・家光上洛
1607年	慶長12					1624 スペイン船の来航禁止 朝鮮通信使来日(家光將軍襲職祝賀)
1608年	慶長13					
1609年	慶長14					
1610年	慶長15	駿河小判座を江戸に統合	駿河銀座を江戸に移転	長崎銀座設置(輸出銀取締り) 元和通宝(銅錢) 発行	1631 奉書船貿易の開始	1634 家光上洛
1612年	慶長17	家康 1616没		全国に操銭令 元和通宝(銅錢) 発行		1635 武家諸法度(寛永令)を改訂、参勤交代の制度化
1616年	元和2					
1617年	元和3					
1621年	元和7	3代家光 1623～51没	佐渡に小判座出張所を設置			
1622年	元和8					
1634年	寛永11	秀忠 1632没				
1635年	寛永12					

1636年	寛永13		5月、幕府、東海道などの宿駅に幕府所持の古銭を配布 江戸、近江坂本に銭座を開設 6月 寛永通宝を発行 銭貨の私鋳を禁止	1636 朝鮮通信使来日 1620～40年代 秀忠・家光 度々日光社参	1636 幕府の大造替、家光 日光社参
1637年	寛永14			1637～38 島原・天草一揆	
1640年	寛永17			1637 銅の海外輸出を禁止	
1643年	寛永20			1639 ポルトガル船の来航禁止	
1644年	寛永21			1641 オランダ商館を長崎に移す	
寛永年間				1643 朝鮮通信使来日(家綱誕生祝賀)	
1656年	明暦2	4代家綱 1651～80没		1645 銅の輸出が解禁される	
1659年	万治2			1655 朝鮮通信使来日(家綱平軍慶祝賀)	
1665年	寛文5			1659～1684 長崎貿易銭(輸出用)	
1668年	寛文8			1661 福井藩、藩札発行(現存最古の藩札)	
1670年	寛文10			1664 対オランダ金輸出許可	
1671年	寛文11			1668 対オランダ、中国へ銀の輸出禁止	
1682年	天和2	5代綱吉 1680～1709没		1669 樹の規格を統一 1669 シャクシャイーの戦い	
1692年	元禄5			1671 中国への銀の輸出解禁	
1695年	元禄8			1672 長崎貿易に市法貨物商法	
1697年	元禄10			1682 朝鮮通信使来日(綱吉平軍慶祝賀)	
1698年	元禄11			1685 長崎貿易に御定高制	
				1694 柳沢吉保、老中に就任	
				1696 萩原重秀、勘定奉行に就任	

【主な展示資料】

資料名	年代
自然金(枝幸砂金塊)	—
譲葉金	16世紀
蛭藻金	16世紀
天正大判(菱大判・長大判)	16世紀
慶長大判	1601(慶長6)年
分銅(20両、10両、2両)	江戸時代
後藤四郎兵衛家による慶長大判鑑定の絵図並極書	19世紀
武藏墨書小判	16世紀
駿河墨書小判	16世紀
額一分金	16世紀
金銀図録	1810(文化7)年初版
慶長古铸小判	16世紀
慶長小判	1601(慶長6)年
慶長一分金	1601(慶長6)年
石州銀	16世紀
菊一文字丁銀	16世紀
大黒くくり袴丁銀	16世紀
御用留便覽(金銀御吹替次第)〈筆写史料〉	原本:江戸時代
慶長丁銀	1601(慶長6)年
慶長豆板銀	1601(慶長6)年
御公用銀	16世紀
古豆板銀	16世紀
元禄丁銀	1695(元禄8)年
永楽通宝	1411(永楽9)年
加治木錢	16~17世紀
慶長通宝	1606(慶長11)年
元和通宝	1617(元和3)年
寛永通宝 水戸錢	1626(寛永3)年
寛永通宝	1636~1637(寛永13~14)年発行
寛永通宝(「文錢」)	1668(寛文8)年
寛永錢譜	1795(寛政7)年
錢さし 寛永通宝(1貫文、100文)	江戸時代
長崎貿易錢	1659(万治2)年
長崎年表	1888(明治21)年
長崎地名考	1893(明治26)年
レアル銀貨	18世紀
ファナム金貨	18世紀
オランダ東インド会社 銀貨・銅貨	18世紀
元禄小判	1695(元禄8)年
宝永小判	1710(宝永7)年
役者絵 尾上松助(歌川国貞)	19世紀
折敷と銀の包紙	—
瓦版 御上洛ニ付拝領銀被下置候	1863(文久3)年
包金(万延二分金百両)	19世紀
包銀(銀一枚)	江戸時代
青ざし 寛永通宝(300文・500文)	17世紀

○関連展示 「16~17世紀の金と銀」

資料名	年代
石州銀	16世紀
筑前博多御公用銀	16世紀
石見銀山旧記	1816(文化13)年
甲州金(古金)	16~17世紀
天正越座金	1574~1578(天正2~6)年
加賀花降百目銀錠	16~17世紀
切遣い銀(出羽窪田銀・院内銀・野代銀・湯沢銀)	16~17世紀
切遣い銀(五左衛門銀・藤字銀)	16~17世紀
切遣い銀(平田銀・加賀次の字銀・佐渡徳通印銀)	16~17世紀
切遣い銀(越後徳字銀・長字銀・永字銀)	16~17世紀
切遣い銀(越後シカミ宝字銀・長岡寛字銀)	16~17世紀
切遣い銀(湯沢拾三銀・矢羽根銀)	16~17世紀
切遣い銀(米沢銀・津軽銀)	16~17世紀
金銀図録	1810(文化7)年初版
印子金	16世紀
分銅金(桐・吉・定・亀甲桐紋)	16世紀後半~17世紀前半
天正大判(大仏大判)	1608(慶長13)年
慶長大判(明暦判)	1658(明暦4)年
国家金銀錢譜	1746(延享3)年
六十余州名所図会 佐渡金やま (初代歌川広重)	1853(嘉永6)年9月
諸国金山ノ図 (初代歌川芳豊)	1860(万延元)年10月
諸国名所百景 佐渡金山奥穴の図 (二代歌川広重)	1859(安政6)年11月
大日本物産国会 佐渡国金山之図・佐渡金掘之図 (三代歌川広重)	1875(明治8)年
金銀山大盛祭礼図	江戸~明治時代

※展示期間中、一部の資料については展示替えを行います。

ご協力をいただいた機関

(50音順)

出光美術館
国立国会図書館
国立歴史民俗博物館
堺市博物館
佐渡市教育委員会
(財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

住友史料館
東京国立博物館

Image:TNM Image Archives Source://TnmArchives.jp/
東京都立中央図書館特別文庫
徳川美術館
長崎歴史文化博物館
早稲田大学図書館



「幕府銀座之図」(東京都立中央図書館特別文庫所蔵)

【主要参考文献】

○著書

- 青木国夫、葉賀七三男編『江戸科学古典叢書 1 佐州金銀採製全図ほか』恒和出版、1976 年
熱田公 『天下一統』『日本の歴史⑪』集英社、1992 年
安野真幸 『楽市論—初期信長の流通政策』『叢書・歴史学研究』法政大学出版局、2009 年
池亨編 『錢貨—前近代日本の貨幣と国家』青木書店、2001 年
伊東多三郎『近世史の研究 第五冊 領国・鉱山・貨幣』吉川弘文館、1984 年
浦長瀬隆 『中近世日本貨幣流通史—取引手段の変化と要因』勁草書房、2001 年
榎本宗次 『近世領国貨幣研究序説』東洋書院、1977 年
岡美穂子 『商人と宣教師 南蛮貿易の世界』東京大学出版会、2010 年
小野武雄編『江戸物価事典』展望社、1979 年
加藤栄一 『幕藩制国家の形成と外国貿易』校倉書房、1993 年
川戸貴史 『戦国期の貨幣と経済』吉川弘文館、2008 年
岸本美緒 『東アジアの「近世」』山川出版社、1998 年
京都大学近世物価史研究会『15~17 世紀における物価変動の研究』読史会、1962 年
黒田明伸 『貨幣システムの世界史—〈非対称性〉をよむ』岩波書店、2003 年
小葉田淳 『日本貨幣流通史』刀江書院、1969 年
小葉田淳 『金銀貿易史の研究』法政大学出版局、1976 年
小葉田淳 『貨幣と鉱山』思文閣出版、1999 年
小葉田淳 『日本鉱山史の研究』岩波書店、1968 年
小葉田淳 『続日本鉱山史の研究』岩波書店、1986 年
桜井英治、中西聰編『流通経済史』《新体系日本史 12》山川出版社、2002 年
鈴木公雄編『貨幣の地域史』岩波書店、2007 年
鈴木康子 『近世日蘭貿易史の研究』思文閣出版、2004 年
高木久史 『日本中世貨幣史論』校倉書房、2010 年
瀧澤武雄、西脇康編『貨幣』東京堂出版、1999 年
田谷博吉 『近世銀座の研究』吉川弘文館、1985 年
永積昭 『オランダ東インド会社』講談社、2000 年
永積洋子 『近世初期の外交』創文社、1990 年
永積洋子 『平戸オランダ商館日記——近世外交の確立』講談社、2000 年
永積洋子 『朱印船』吉川弘文館、2001 年
日本銀行調査局『図録日本の貨幣』1~4、東洋経済新報社、1972~1974 年
長谷川利平次『佐渡金銀山史の研究』近藤出版社、1991 年
羽田正 『東インド会社とアジアの海』《興亡の世界史 15》講談社、2007 年
浜下武志、川勝平太編『アジア交易圏と日本工業化 1500~1900』《社会科学の冒険 12》リブロポート、1991 年
藤井讓治 『江戸開幕』『日本の歴史⑫』集英社、1992 年
本多博之 『戦国織豊期の貨幣と石高制』吉川弘文館、2006 年
桃木至朗編『海域アジア史研究入門』岩波書店、2008 年
八百啓介 『近世オランダ貿易と鎖国』吉川弘文館、1998 年
山脇悌二郎『長崎のオランダ商館』中央公論社、1980 年
山脇悌二郎『長崎の唐人貿易』吉川弘文館、初版 1964 年、新装版 1995 年
山脇悌二郎『絹と木綿の江戸時代』吉川弘文館、2002 年
歴史学研究会編『越境する貨幣』《シリーズ歴史学の現在 1》青木書店、1999 年
ロナルド・トビ『鎖国という外交』《全集日本の歴史 9》小学館、2008 年
- (史料集)
『上方歌舞伎集』《新日本古典文学大系 95》岩波書店、1998 年
榎本弥左衛門 大野瑞男校注『榎本弥左衛門覚書』東洋文庫、2001 年
ケンペル／斎藤信訳『江戸参府旅行日記』東洋文庫、1977 年
佐藤進一、百瀬今朝雄『中世法制史料集』第 5 卷、岩波書店、2001 年
永積洋子訳『平戸オランダ商館の日記』I ~IV、岩波書店、1969・1970 年
西脇康校訂『新訂 加藩貨幣録』書信館出版、2005 年
三浦淨心／原田伴彦編「慶長見聞集」(『見聞記』《日本庶民生活史料集成 8》三一書房、1969 年)
- (自治体史)
秋田県 『秋田県史 第 2 卷 近世編 上』1964 年
静岡県 『静岡県史 通史編 3 近世 1』1996 年
台東区 『台東区史 通史編 I』1997 年
平戸市 『平戸市史 海外史料編 2・3』2000・1998 年
山形県 『山形県史 第 2 卷 近世編上』1985 年

○論文

- 荒野泰典 「近世的世界の成熟」
(荒野泰典, 石井正敏, 村井章介編『近世的世界の成熟』《日本の対外関係 6》吉川弘文館、2010 年)
- 梅崎恵司 「福岡藩 黒崎鋳銭場 一元和～寛永の時」(『研究紀要』((財)北九州市芸術文化振興財団) 23、2009 年)
- 神谷正義 「寛永通寶鋳銭場の鋳銭関係遺物 一岡山市二日市遺跡」
(松村恵司, 栄原永遠男編『わが国鋳銭技術の史的検討』科学研究費報告書、2003 年)
- 川戸貴史 「十六世紀後半京都における金貨の確立」(池亭編『室町戦国期の社会構造』吉川弘文館、2010 年)
- 斎藤広宣 「近世初期から中期における甲州金について」(『信濃』21-1、1969 年)
- 桜井英治 「日本中世における貨幣と信用について」(『歴史学研究』703、1997 年)
- 桜井信哉 「近世における贈与による統治一貨幣を中心に」(『横浜経営研究』23、2002 年)
- 島田竜登 「世界の中の日本銅」(荒野泰典ほか編『近世的世界の成熟』《日本の対外関係 6》吉川弘文館、2010 年)
- 高木昭作 「『公儀』権力の確立」(深谷克己, 加藤栄一編『幕藩制国家の成立』有斐閣、1981 年)
- 徳川義宣 「徳川家康と甲州金一天神瓦を中心に」(『金鏡叢書』24、1998 年)
- 鳥谷芳雄 「御公用丁銀について」(『季刊文化財』115、2007 年)
- 中田易直 「後藤庄三郎の出自について」(『紀要』(中央大学文学部) 26、1981 年)
- 中田易直 「後藤庄三郎と茶屋四郎次郎」(北島正元編『江戸幕府 一その実力者たち(上)』国書刊行会、1983 年)
- 永積洋子 「平戸商館はオランダの戦略拠点か」(中村質編『鎖国と国際関係』吉川弘文館、1997 年)
- 藤井譲治 「十七世紀の日本—武家の國家の形成」(『岩波講座 日本通史 12 (近世 2)』岩波書店、1994 年)
- 八百啓介 「十八世紀転換期の出島オランダ貿易」(中村質編『鎖国と国際関係』吉川弘文館、1997 年)
- 八百啓介 「外交文書にみる近世初期の徳川政権」(藤野保先生還暦記念会編『近世日本の政治と外交』雄山閣出版、1993 年)
- 安国良一 「近世社会と貨幣に関する断章」(『新しい歴史学のために』191、1988 年)
- 安国良一 「貨幣の機能」(朝尾直弘, 綱野善彦ほか編『岩波講座 日本通史 12 (近世 2)』、岩波書店、1994 年)
- 安国良一 「貨幣史における近世—錢貨を中心に」
(永井久美男編『近世の出土銭 I—論考編』兵庫埋蔵銭調査会、1997 年)
- 安国良一 「日本近世の経済的条件と三都」(『日本史研究』404、1996 年)
- 安国良一 「近世の都市社会と貨幣」(『都市の身分願望』《〈江戸〉の人と身分 1》吉川弘文館、2010 年)
- 山本英二 「幕藩前期三河国における年貢収取の史料的考察」(『国文学研究史料館紀要 アーカイブズ研究篇』4、2008 年)
- 山脇悌二郎 「長崎オランダ商館の会計帳簿」(『日本歴史』272、1971 年)
- 山脇悌二郎 「オランダ東インド会社と日本の金」(『日本歴史』321、1975 年)
- 行武和博 「近世日蘭貿易史料に関する数量的研究—彼我両国伝存諸史料の比較・分析—」
(『史学雑誌』116-1、2007 年)
- 行武和博 「家康政権の対外政策とオランダ船貿易—『平戸商館初期』の日蘭貿易実態(1609-1616)—」
(『東京大学史料編纂所研究紀要』17、2007 年)
- 行武和博 「平戸・長崎オランダ商館の会計帳簿と日蘭貿易—会計史料に基づく 1642 (寛永 19) 年の貿易取引額—」
(『社会文化史学』48、2006 年)
- 行武和博 「近世日蘭貿易の数量的取引実態—17 世紀前期オランダ商館作成「会計帳簿」の解説・分析—」
(『社会経済史学』72-6、2007 年)
- 行武和博 「近世オランダ船貿易の輸入品一分類別品目明細一覧 (①17 世紀前期) —」(『日蘭学会会誌』54、2006 年)
- 渡辺信夫 「元禄の貨幣改鑄と領国貨幣の消滅」
(豊田武教授還暦記念会『日本近世史の地方的展開』吉川弘文館、1973 年)
- 渡政和 「錢貨 考古・文献・絵画資料からみた縁錢の表現」(『月刊歴史手帖』24-7、1996 年)

○展示図録

- 大阪府立狭山池博物館『国土を拓いた金物たち』2007 年
- 大阪歴史博物館 『よみがえる銅』2003 年
- 甲斐黄金村湯之奥金山博物館『甲斐黄金村湯之奥金山博物館展示図録』1997 年
- 国立科学博物館 『日本の鉱山文化—絵図が語る暮らしと技術』1996 年
- 国立歴史民俗博物館 『東アジア中世海道 海商・港・沈没船』2005 年
- 国立歴史民俗博物館 『天下統一と城』2000 年
- 佐賀県立名護屋城博物館『秀吉と城』2005 年
- 島根県立古代出雲歴史博物館, 石見銀山資料館『輝きふたたび 石見銀山展』2007 年

○その他 (報告書等)

- 北九州芸術文化振興財団『黒崎城跡 11(18・26 区)』
(『北九州市埋蔵文化財調査報告書』430、北九州市芸術文化振興財団、2010 年)
- 桜井英治監修「シリーズ 貨幣の歴史学」(『にちぎん』9～19、日本銀行、2007～2009 年)
- 島根県教育委員会『石見銀山関係編年史料綱目』島根県教育委員会、2002 年
- 島根県教育委員会『石見銀山史料解題 銀山旧記』島根県教育委員会、2003 年
『ベトナム北部の一括出土銭の調査研究』
(『昭和女子大学国際文化研究所紀要』12、昭和女子大学国際文化研究所、2008 年)
- 『週刊朝日百科 日本の歴史 中世から近世へ⑤信長と秀吉 天下一統』朝日新聞社、2002 年
- 『週刊朝日百科 日本の歴史 近世 I -①泰平の世』朝日新聞社、2003 年

企画展図録

貨幣・天下統一

—家康がつくったお金のしくみ—

[会期]

2011年2月19日(土)～7月2日(日)

日本銀行金融研究所

貨幣博物館

電話:03-3277-3037(直通)

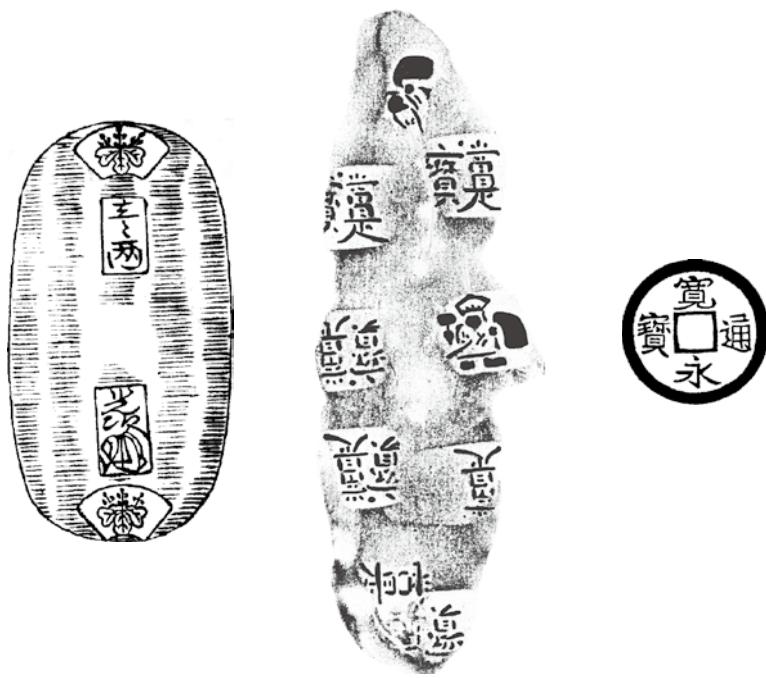
〒103-0021

東京都中央区日本橋本石町 2-1-1

<http://www.imes.boj.or.jp/cm>

2011年3月14日発行

[編集・企画] 関口かおり 湯川紅美



日本銀行金融研究所

貨幣博物館